

「小田原藩校」が小田原高校のルーツならば、2022年は200年の時を刻むこととなります。本稿は藩校がどのような経緯で小田原高校に至ったのか、辿ってみようとしたものです。しかし残念ながら、歴史に混沌とした期間がありそれ以上は踏み込めません。それでも両校を関連付けされると思われるところは推測を加えて纏めました。なお、あくまでベースとなる歴史上の出来事やその時系列は曲げずに、主としてWikipediaおよび小田原高校のHP並びに神奈川県教育委員会のHPを参考にしています。

なお編集に際しては、2組・石井敬士氏より資料の提供および考察、加筆・補正をお願いし、4組・今道周雄氏並びに2組・下赤隆信氏より助言をいただきました。5組・柳川壺信

母校のルーツを辿る、200年

江戸後期に創設された小田原藩校を、小田原高校のルーツと云っても構わないでしょうか。

その小田原藩校の創設は1822年（文政5年）。

ペリー艦隊来航の30年ほど前、維新まであと40数年です。当時はそうそうたる人物が輩出され、翌年には勝海舟、5～6年後に河井継之助、西郷隆盛や山内容堂、8年後に吉田松陰、大久保利通など維新の大物が続々と生まれています。小田原藩校は、そんな時代に誕生したそうです。

調べてみると、全国の諸藩は行く末を担う人材を育成する必要から、武士の身分の上下を問わずほぼ強制的に入学させる教育施設として開設されたとあります。

300弱もあつた諸藩の中で、今も高等学校となって現存するところは幾つも無く、関東で2校、全国で26校程度。後述するように、小田原藩校も幾度かの変遷を経て小田原高校に繋がっているとされています。

小田原藩では藩主大久保忠真^{ただかね}によって、主として藩の財政再建のため、能力があれば下級武士でも抜擢する意図をもって藩校を設立。講堂「集成館」を中心に、槍場・習書場・剣道場、校庭には馬場や薬草園などを整備しています。

創立当初は「諸稽古所」の名称でしたが、やがて講堂名の「集成館」に改称しています。

授業内容は四書五経の漢学が中心で、習字や音読、教師による講読や生徒同士によるゼミナールといった学習方法を採用したそうです。

この内容はほぼ全国的に共通した授業ですが、当藩には財政再建を主眼として藩校を設立した経緯があり、この頃すでに藩主に覚えの良い二宮尊徳翁が藩に起用されていたタイミングから、まさに財政再建策で注目の

「報徳仕法」などを授業に加えたのではないかと期待しましたが、それを示す資料がありません。その上、二宮翁と藩士との折り合いの悪い評判しか得られず、何とも残念な推測に終わっています。

序でながら、平和が長く続いた江戸期も後期には、武家社会は鎌倉時代にはあった緊張した時世と異なる保守的な風潮が漂い、何かと風習にならう傾向があって、当の小田原藩でも二宮翁の「報徳仕法」のような先取の発想には付いて行けなかったかも知れません。

しかし、藩校では「報徳仕法」の何がしかも授業に組み込まれていなかったとしても、後の神奈川県第二中学校（後の小田原高校）の発足時に、教育者としての経歴も評判も良く二宮翁を尊敬する校長を迎えることになったのは学生にとっても実に幸いで、二宮マインドが引き継がれる格好を呈します。

さて藩校では、試験の機会は多く、落第すれば罰則も厳しく、相続の際には家禄の減俸や親の役職を継ぐにもままならず、無役のまま生涯を送るといった恐れもあったそうで、かなり厳しいようでした。

この過程を経て必修課程が終了し、武芸に励む者、医学へ進む者、任官する者など様々であったとあります。

しかし、小田原藩校「集成館」の行く先は多難でした。

江戸時代を終え明治の代に変貌してゆく革命の只中に置かれてしまいます。いずれの藩校と違わず、嵐の中の船の様に翻弄されたといつて過言ではありません。

維新を成就しても、その後の国内は廃藩置県などすべての改革改変に追われて、学制も変転してゆきます。小田原藩校も、名前が「文武館」に変わって、遂に明治5年、藩校は廃止の憂き目に会います。

その後、小田原地方では学校創設の機運は旺盛でしたが、主として財政面による頓挫、また諸種の対立、母体の統廃合などにより実を結ぶことなく、実に30年近くにおよぶ、まさに産みの苦しみの時代に入っています。

すでにこの頃には、残念ながら藩校は跡形も有りません。

この辺りを例えると、源流から発した流水が扇状地の地盤に沁み込んで伏流し、やがて地表に新しく河川となって現れる様子を見るようです。機運が十分満ちた地盤には、やがて教育インフラや維持する資力を持った時代が到来して、集約されて登場したのが第二中学校であったと思わざるを得ません。

こうして、ようやく第二中学校の誕生に辿り着くこととなります。

吉田松陰の甥が初代校長に就く

明治 34 年のことでした。神奈川県第二中学校（後の小田原高校）が誕生しました。

その初代校長に、長州藩士・吉田松陰の甥（妹の息子）で吉田家を継いだ吉田庫三が就任。

（松下村塾の塾生。15 歳の時に上京してから、漢学をはじめ国文、法制、心理や教育などを高名な学者に就いて学び、22 歳になって学習院ではじめて教鞭をとって、以降陸軍幼年学校や商船学校の教壇にも立った。その後、同郷であった神奈川県知事・周布公平のたつての要請で、第二中学校へ赴任して来ます。周布は吉田を教育者として高く評価していたそうです）

入学式は同年 4 月、二学級 80 名。このとき校章は「神中」（じんちゅう。校章が「櫨の葉」になったのは、昭和 23 年神奈川県立小田原高等学校に改称した時でした）。

吉田校長は三年間の在任中、質実剛健な校風づくりを目指し「至誠無息・堅忍不拔」の校訓づくりに努めました。

なお、乃木希典陸軍大将とは姻戚関係にあつて、終生親交があつたといひます。

しかし学校では、自身の家柄や吉田松陰のことを触れることは無く、郷土の偉人の二宮尊徳翁を褒め称え、その言行を教訓にすべしと力説していたそうです。

そのエピソードから推測するに、二宮尊徳翁の「報徳仕法」は一部でも講話の格好で披露されたり、授業に添えられていたのではないかと期待が膨らみます。例え、授業に具体的に組み込まれていなくても、尊敬する二宮翁のマインドが校長によって引き継がれたのは間違いありません。

結局、小田原藩校の拠つて建つた風土に、時代が求める人材を育成するに相応しい第二中学校が誕生したのは必然であつたように思ひます。

やがて、

明治 40 年には校旗が決まり同窓会も発足。

校訓は、山県有朋・東郷元帥の揮毫による二対の扁額として講堂に

明治 44 年、政府の元老として要職にあつた山県有朋による揮毫の「至誠無息」を扁額として講堂正面に掲げ、それから後の大正 3 年になつて、既に元帥となつていた東郷平八郎から「堅忍不拔」の揮毫を得てもう一つの校訓として扁額にし、二対の校訓が講堂正面の左右に揃うことになりました。

口幅つたいようですが、校訓の由来について、おさらいします。

先ず、「至誠無息」。

この文言は、儒学の教科書・四書の最後に読むものとされている難解な「中庸」にあり、『至誠は息むことなし』と読み換え、意味を要約すると、「この上ない誠実さ・真心をもって生涯を貫き通しなさい。そのためには一時の無理に偏らず、ひたすらその信念が続くように歩むこと」と解釈されます。

「堅忍不拔」

中国北宋の政治家、文豪、書家として著名な蘇軾そしょくの表わした「晁錯論ちようそろん」が出典で「古の大事を立つる者は、唯だ超世の才有るのみならず、亦た必ず堅忍不拔の志有り」と述べています。「堅忍」は我慢強く耐え忍ぶ、「不拔」は力を抜かない。つまり「意志をしっかりと持って、何事にも動じないこと」。

そして昭和 23 年 4 月、新制度によって神奈川県立小田原高等学校となりました。

.....

編集後記)

念のため、小田原藩校と小田原高校との関連について、インターネット上の百科事典といわれる「Wikipedia」では、小田原高校の設立に関して 1822 年の藩校が「創基」であると示され、小田原高校のHP並びに神奈川県教育委員会のHP上では、沿革欄で小田原高校の創世期として藩校から神奈川第二中学校（現小田原高校）開校までの経緯を繋げて紹介しています。こうした情報からは、繋がりがあったことが伺えます。

さて、校訓の「至誠無息」・「堅忍不拔」。

小生にとっての校訓は、社会で働く青壮年期に心すべき教訓の域を出ない念仏で終わっていました。2020 年に放映されたTV番組でとり上げられた際にも、校訓は門前の小僧の念仏の如でした。しかし、本稿で採り上げ調べるうち、思い当たること多々気付く昨今で、生ある限り貫くべき教訓であることを、恥ずかしながら思い知った次第です。